

の調達では上官も兵も野犬、魚等の調達にはげみ、二か月後、漸く本隊に合流しました。しかしここでも食糧はありませんでした。

当初、同年兵は十二人でしたが、今は私とほか一人しかいません。初年兵が二組と入院者が若干いました。

海上で復員待ちのとき、マラリヤにかかり、四十度以上の熱が出て苦勞しました。復員後も国立病院に二年ほど通いました。博多に上陸、昭和二十一年四月三日帰宅しました。

追 想

愛知県 林 忍

このたび過ぎし日の軍隊当時の思い出を語るにあたり、ありし日の戦友の勇姿や、愛馬への思いが臉に浮かび感慨無量で、いつしか目頭に熱いものを感じ、あいせきの情禁じえなく、人心転々せきりようをおぼえる。

我々は徴兵により国家のかんじょうとして国の安泰を

ちかい、武運長久と存亡をかけて青春のたぎる血潮を戦場で燃焼させ、報国のまことをささげるのいちずであった。

あの日、今日の命は長らえても明日の命を知るものではなく、奮闘連戦連勝、日章旗をかかげた日もあれば、敵の猛攻逆襲にあい九死に一生をえての悪戦苦闘する日もしばしばあった。

師団輜重の輸送がとだえ、りょうまつはけつぼう、弾薬までが底をつき、我が砲兵隊の戦闘機能はそうしつし、砲と運命を共にすると、護身の手榴弾を手にした。明日は奇襲攻撃、「別令があるまで待機せよ」との伝達に身のまわりをととのえ、今か今かと命令を待った。

稜線が白むころ、伝令が飛び込んできた。それは待ちわびた待望の輜重の到着の知らせであった。天のすくいに隊内は生気を取りもどしわきあがった。

昭和十八年の常德作戦につぐ大陸打通を企図する湘桂作戦が火ぶたをきった。

昭和十九年四月二十八日応山を発進した第三師団は、武漢をへて崇陽に集結、軍の左第一線となった。

前衛の歩兵第六連隊第三大隊に配属の砲兵三連隊第三中隊は五月二十七日以来瀏陽、醴陵、萍鄉、攸県、茶陵、安仁に進攻した。時あたかも雨期のような長雨にたたられ、泥濘の道なき道を追跡、人馬共に苦勞こんばいし、息をつくまもない攻防とパキンパキンとさく裂する銃弾の音が頭上をつんざくすさまじさであった。

友軍の砲煙立ちこもるなかに、青黄の火をふく敵の迫撃砲の異様な音、敵機の襲撃、機銃掃射の弾が雨あられとなり、敵のしかばねを踏み越えての強行突破であった。

その時「班長がやられた」の音が砲煙のなかでかすかに聞こえた。やはり敵弾を受けての班長の戦死であった。他にも傷兵が担架で護送されるのが目にいたましく、またこの安仁の戦場で愛馬「花凡号」と「金竜号」の二頭が腹部の貫通で再起は出来なかった。犠牲となつた人馬に暇をつげ安仁を立ち、零陵に進撃、道県に到着したのは九月十六日であった。

この地に友軍が到着するや、敵の戦略であったか、一夜のうちに町は火の海となり、みる影もなく焼け野が原

と化した。

次期作戦まで休養、補給のためこの道県に約一か月駐留した。立ちなおされた兵員は志気をこぼし、つづく作戦に出発、柳州を目指した。

当の柳州飛行場を十一月十日未明、首尾よく占領、敗走する敵を急進して宣山宣化に追い討ちをかけ三千メートル級の山嶽地帯を突破して貴州省に進攻、都江の八要塞を攻略して、重慶のどもとにみる貴揚を指呼の間に望んだ。さらに都勻に進出したのは酷寒の肌も凍る一月であった。陸上部隊で大陸最奥地の都勻に足跡を印し、先陣を切ったのは歩六と我が砲三隊のみであった。

苛烈な戦闘は果てしなくつづくさいちゅうに、風雲急を上げ、非常呼集のラッパの音がひびいた。なにかとたたづを吞んで整列すると、連隊長の敗戦のげだつてであった。胸が張りさける思いに悲憤がふきだしたが、さすがに将兵もなすすべもなくがくぜんと肩をおとす。

多少のまをおき反転命令が出た。無念に武装解除。いなせな分隊と異名を取ったわが部隊も丸腰となつてはロボット同然。敗戦の宿命とはいえ、またも飢えて灼熱の

暑さに苦しみながらの放浪、反転の長蛇の列が幾日か続いた。

やっとたどりついたのは鎮江で、すでに秋なかばであつた。ひとまずこの地に駐留した。そのころには戦友たちも敗戦の興奮からさめたのか、来年は復員出来るかとの噂もではじめ、あまり口にしなかつた国もとの親、兄弟、姉妹、妻子の安否を気づかうようになった。互いに出身地を明かし、望郷の思いを語り、俺は沖繩の出身だ、広島だという。玉碎あるいは原爆投下の報が伝わってきたがまったくくわしいことはわからない。いろいろな不安が交さくする。

また、召集兵の一人は、昭和十六年に滿蒙の開拓団に入植、黒河省の国境に近い孫呉に女房子供を残し現地召集できたと、声を詰まらせる。樺太出身の兵隊もいた。ソ連軍の参戦で樺太全土の婦女子は強制疎開を強いられ、羅災した住民は西海岸に逃げまどう。ソ連軍の艦砲射撃によって真岡の町はぐれんの火に包まれたと報道された古新聞を手に涙ぐんでおつた。

昨日まで生死を共にした戦友達をみるにつけ、きくに

つけきょうがく悲痛どうか災禍からまぬかれておつてくれと肩を寄せあい敗戦の悲運をたがいにかみしめなくさめあつた。

大陸の戦い

愛知県 小林 詮 一

私は昭和十六年兵で、関東軍要員として中部六部隊に入隊、三か月の教育を受けて、征途についた。満州国奉天省鉄嶺の満州第六八九部隊に到着、初年兵教育が終了すると勤務が始まつた。

とくに厩当番は二班、二班の厩舎で約七十頭の軍馬を夜間は一人で管理するのである。癖の悪いのが一班、二班で十頭ぐらいいはいたと思う。初年兵ではそれぞれの馬の癖がわからず、ひたすら事故のないよう祈るばかりである。乗馬訓練ではあぶみなしの裸馬から始まり、尻の皮が破け猿の尻のようで、入浴どころではなかつた。入浴しないわけにはいかず、入浴に行けば初年兵は裸で一